

落書きによる表現教育への一考察

－幼児の描画活動の指導を通して－

A Study on Expression Education by Graffiti

－Through guidance on drawing activities of young children－

大場 六夫

Mutsuo Ohba

キーワード：落書き、幼児教育、美術表現

1. はじめに

最近、夢をもたない子どもが多く見受けられると言われている。内閣府が平成25年度に行った「小学生・中学生の意識に関する調査」においては、将来就きたい職業の質問項目に対し、スポーツ選手（14.0%）、幼稚園・保育園の先生（6.4%）、看護師・介護福祉士（5.0%）、医師・歯科医・薬剤師（4.9%）と続くのだが、気になるのは「わからない」と答えた子どもの割合が16.7%ということである。「わからない」と答えた割合が、就きたい職業の1番であったスポーツ選手よりも多いのは驚きである。これは、子どもの意思とは無関係に押し進められる、親の強い要望で行われている早期知的学习などによる、悪しき影響ではないかと筆者は危惧する。

そこで本稿では、子どもが生まれながらにしてもつ能力を把握し、それを生かした教育が大切であり、その中でも、幼児の潜在能力がもっとも発揮される落書き遊びについて論じていくこととする。落書き遊びとは、誰の指示も受けないため表現が解放されるので、そこで描かれる幼児の絵は彼らの内面の現れであるといえる。その落書き遊びからはじまる美術教育を、どのように分析すべきか、どのように指導すべきかを実践を通して考察する。

2. 落書き遊びの教育的意義

1) 落書きの本来の意味

「落書き」の意味を辞書（大辞林 第三版）で調べると[「らくしよ（落書）」から転じた語]であり壁・塀など、本来書くべきでない所にいたずら書きをすること。また、その字や絵と説明されている。この言葉を、筆者なりに解釈すると、本来書くべきでない所に書くという行為は、言い換えると誰かに依頼されたり指示されたりすることなく書く行為であり、本来書くはずでなかったものを書くという行為だといっても過言ではない。

【写真①】



【奈良学園大学七夕イベントにおいて「らくがきあそび」を設定し、多くの近隣の子どもたちが落書きを体験している様子】

2) 七夕イベント「らくがきあそび」の絵について

今回のイベントでは、与えられた一定のコーナーに落書きをすることにしたが、本来であれば特設場所は不要である。落書きだから、子どもが道路とか壁とか床とか自由自在に場所を選び描けばよい。今回は、一定の場所で限界はあったが参加した子どもたちは、存分に楽しんでいるように思えた。それは、当初予定していた模造紙が短時間で足りなくなったからである。

落書きに使われた画材はクレヨンで、叩きつける、線を何度も往復させる、自身のカラダより大きく円を描く、塗りつぶす、七夕に因んだイラスト画、漫画のキャラクター、中には母親との合作もあった。かつては、落書きは、絵画作品として認められることはなかった。特に日本社会では、落書きのような自由画は、自分勝手や我儘として評価はされなかった。そのため、落書きを描くことは歓迎されない文化がある。しかし今日の幼児教育の表現指導では、落書きは、子どもの成長発達にとり大切な活動だと認められている。それは、落書きという行為が、子どもが夢中になれる遊びの一つとして評価されたからである。落書きは、自由な発想で、何をどのように描いてもよいという解放感から、子ども本来の内面の絵（抽象的）が表現される。すなわち、このように描かないといけないという概念を崩すことになる。

なぜ子どもは、絵を描くのかという問いに、磯部（2006）は次のように述べている⁽¹⁾。

子どもが絵を描くことは「生きる喜び」であり、また人間の本能ではないかを感じる。「子どもたちの発達や育ちに欠くことのできない必要条件」であると思う。たとえば、テーブルの上に汁がこぼれたとき、大人はすぐにそれを拭き取ろうとしますが、1歳前後の子どもを見ていると、指で触り、その指をなめ、匂いをかぎ、そして手で左右に広げてぬたくりを楽しみます。また、園庭に雪が降り真っ白になれば、そこに足跡がつくのを発見し、それを楽しむように駆け回ります。目の前に白い紙とクレヨンがあれば、まずはそれをなめ、紙の上に転がし、折ったり、たたいたりし、そのうちに線がひけることを発見し、そしてそれを繰り返していきます。このように、感覚や視覚をはじめ全身の感覚を使い、子どもは「もの」を自分の中に感じて取り込み、そしてまた、「もの」に関わろうとする行為を繰り返し試みていきます。「もの」との関係の中で、全身の感覚で感じて、行為で表すということを絶え間なく繰り返していきます。このような連続した探索活動の中に、「描くという行為」が生まれてきます。

【写真2】



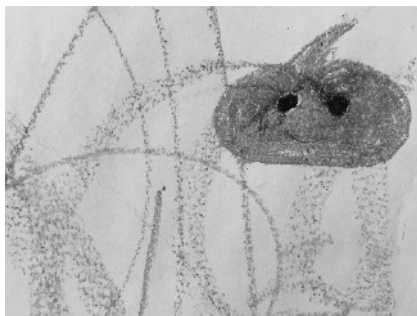
【写真3】



【写真2】 まだ幼少の頃の絵または子どもの心が何らかの理由で乱れている時にみられる絵。そのため描かれたものが何を現しているのかわからない。

【写真3】 子どもは、目で観たとおりを描くだけでなく知っていることを描くことがある。この鳥に足がるのがそれを表現している。

【写真4】



【写真5】



【写真4】 これは、落書きコーナーの隣の教室で「スライム作り」をしていたこともありその楽しかった体験が影響したものと考えられる。

【写真5】 他の子どもが描いた絵の上になぐり描きをして楽しんだもの。外部からの要素がその子どもの心に影響したものであろう。

(1) 磯部錦司「子どもが絵を描くとき」2006年 一藝社 pp11

今回の落書き遊びは、あらゆる年齢の子どもが参加したので、年齢による様々な表現が観られた。またそれらを一枚の模造紙において観ることができ、子どもの絵を比較研究する上でもよき資料になった。今後、年齢と描かれた落書きの関係について、さらに深く研究を進めたい。

ここでの「観る」という表現は、観察する見方をしているため「観る」と表現する。

3. 自由画（落書き）から創造画へ（子どもの視点で）の実践的実証

1) 目的

概念的な絵と創造的な絵の分析と立証。

岡田（1955）は幼児画の創造的な絵と概念的な絵について次のように述べている⁽²⁾。

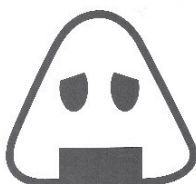
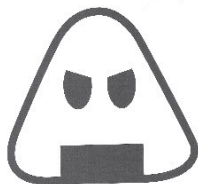
創造的な絵とは、子どものありのままの、すなわち子どもが本当の子どもの心をもって、しかも伸びていく生命力のままに、たくましく描いた絵のことで、それは上手であっても下手であってもかまわない。本物らしく見えても、見えなくてもよい。概念的な絵とは、個人のまねをしたような、また上手に本物のように、説明的に描いた絵のことで、つまり子どもの心のあらわれていない絵のことです。

2) 方法

下記の絵を52名の3歳児に見せて、解説した後で描かせた（保育園にて）。



全員がおにぎりと認識した。
次に以下の2点を見せた



次に2つの目を付けた。「怒っている」
「泣いている」「笑っている」という意見も出た。



最後にこの絵を見せて子ども自身が思ったことを描かせた。
この実験にあたり次のことに留意した。
●子どもに「おにぎり」という言葉は一切発していない。
●描くための用紙、クレヨンはこの時まで各自に配布していない。

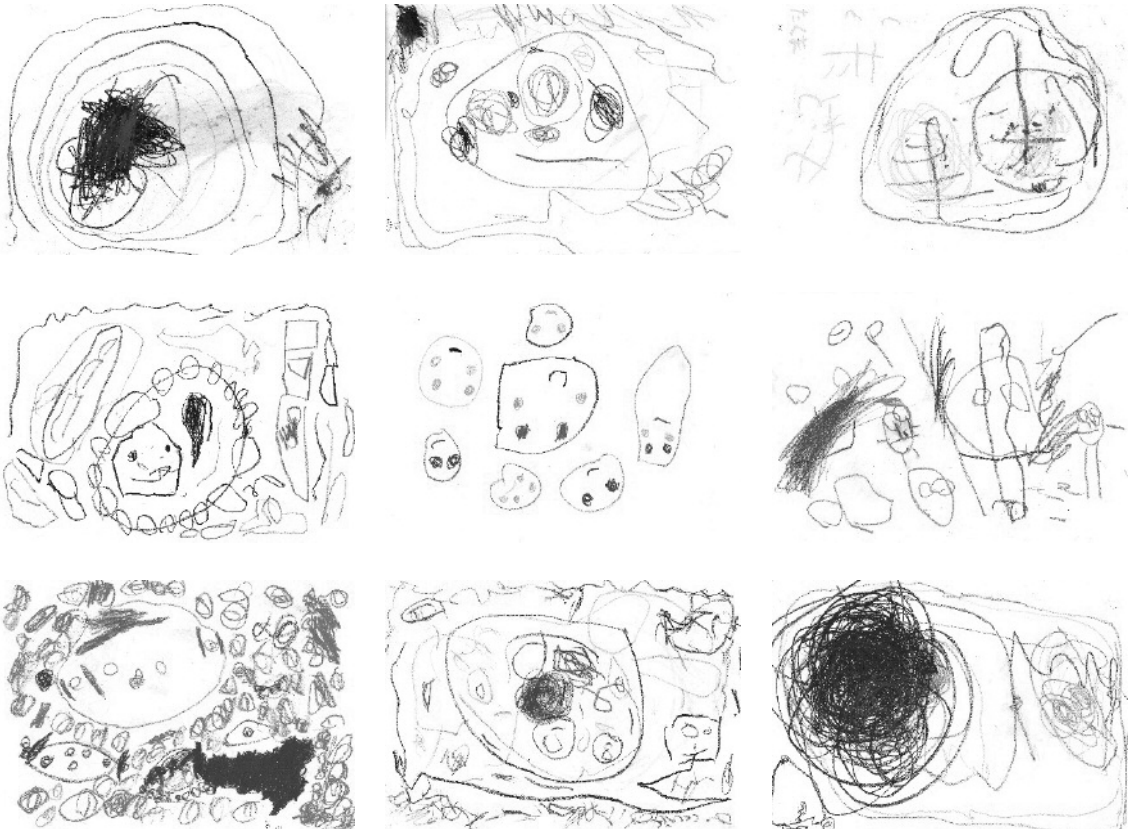
3) 結果と4つの分類

鬼丸（1981）は、ローダ・ケログが提案した初期の幼児の線描きの基本的な20個の基本図形の分析に対し、一

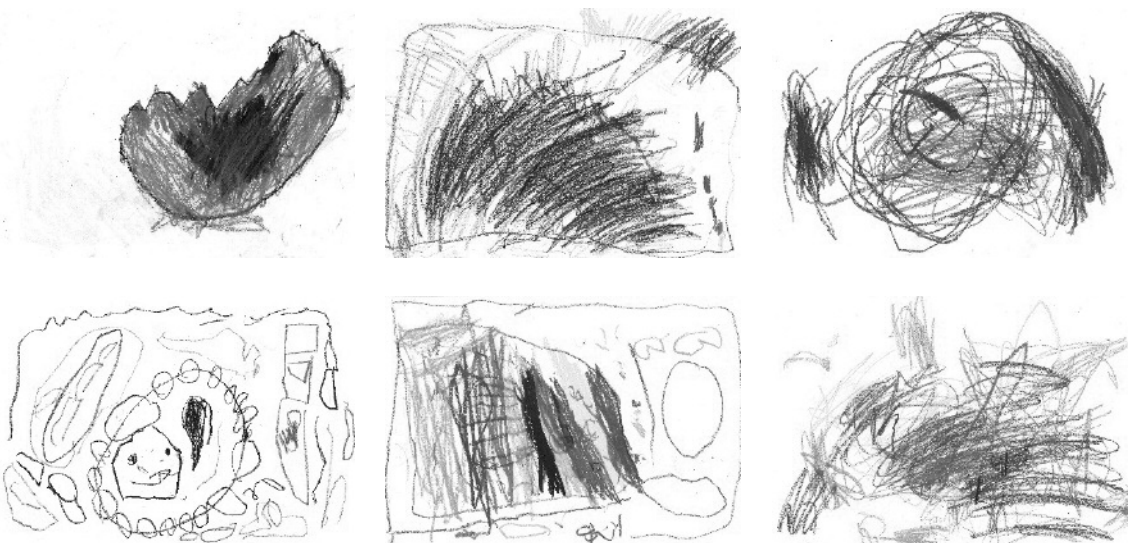
⁽²⁾ 岡田 清 「幼児の絵」1955年 創元社 pp5～8

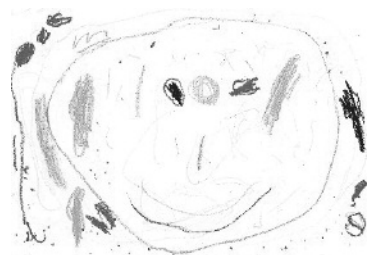
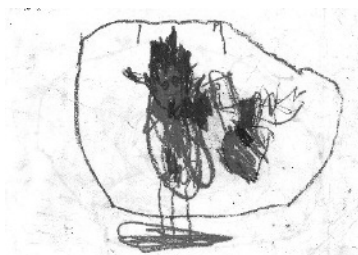
層本質的な少数のパターンに整理還元することを主張した。そして彼は、叩きつけ・振幅・回転・迷走の4つの基本形を立てた。しかし筆者は今回の幼児の作品の分類として、次の4つを提案したい。それは、回転・振幅・複合・迷走の4分類である。

●回転（乳児の描く円は、出発点から終点まで描くのに線が結ばれないといつまでも円を描き続ける。それが回転になって現れる。回転は年齢とともに、線が結ばれることにより消えて行くようである。）

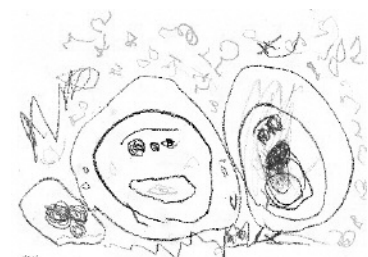
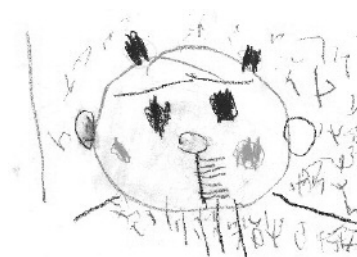
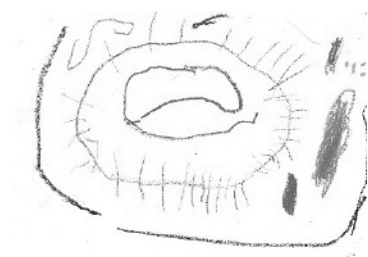
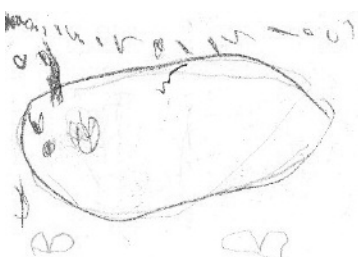
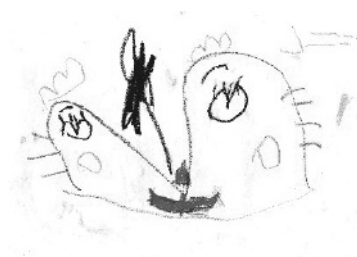


●振幅（この現象は乳児期であれば、肩の関節の稼働範囲に関係してくるようだ。）

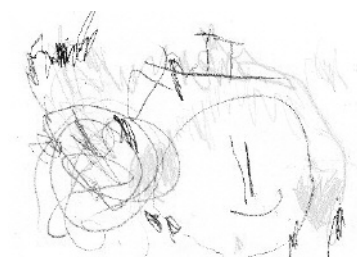
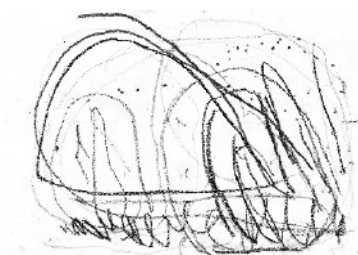
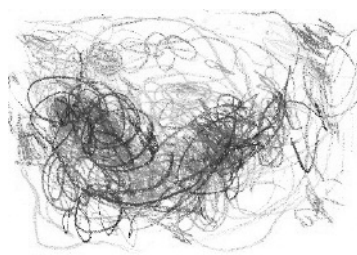




●複合（乳児期を過ぎ3歳になると、体幹だけでなく手足も自由に操れるようになる。絵を描くと回転や振幅、そしてこれまでにないタイプの絵が生まれる。）



●迷走（複合は何を描いているかおよそ判断がつくが、迷走は何らかの心の動きから描かれるため、理解しにくい。心の動きは決して嫌なことだけでなく、喜びの時にも同様のことが起こるようだ。）



（注釈）絵はすべてB4判サイズの下紙に描き、ここに載せている画像はそのサイズと同比率である。絵の大小は、描かれた絵の大きさによるものである。

4) 考察

筆者の提案する分類は、対象者の年齢に起因するものである。例えば「叩きつけ」は1歳児では、肩の関節の運動範囲によって生ずるものであるが、3歳児では、肩の動きがより自由になるため「叩きつけ」が観察できない。そこで筆者は幼児の身体的発育に応じた、新たな乳幼児の絵画分類として新たに「複合」を提案することとした。今後、振幅、回転なども、乳幼児の身体的発達及び精神的な発達を視野に入れて検討の余地があると筆者は考える。これらの詳細なデータは今後のさらなる分析課題である。

5) 描く過程と完成した作品から

「おにぎり」という指導者からの発声がなく、4コマの絵だけを見てすべて創造をした幼児は自身の想像と潜在的な意識だけを基にして作品を描いた。作業は、途中段階においても指導者からの概念的なアドバイスをはじめ「おにぎり」を連想させる声掛けもなく進められた。そのため、幼児の作品や態度には、以下のような特長が見られた。

- ① 「おにぎり」にこだわることなく、様々な表現が見られる。
- ② 描いた絵を何度も見せに来る。
- ③ モノクロの「おにぎり」を見ているのに、その作品はカラフルである。
- ④ 与えられた用紙の隅々まで使用して描いている。
- ⑤ 色の重ね塗りをしている。

4. 幼児の表現活動の指導の在り方について

幼時が表現活動をする場合に、その導入時の指導法は、大きく分けて2つ考えられる。つまり、教え込む教育と引き出す教育である。この両者について、おにぎりの描画活動を例にとり論述する。

一つは、「おにぎり」に対する概念を、指導者が意図的に与える方法である。まず、指導者が幼児に「おにぎりは好きですか？」と質問することから始める。その後、絵を見せて「今日はこのように描きましょう」と例示で誘導する。「おにぎり」のお米の部分は白い、巻かれている海苔は黒いなどと説明も加える。

他方は、「おにぎり」の絵を幼児に見せるが、指導者は「おにぎり」という言葉は使わない。色、形についても何も触れない。「おにぎり」の絵を子どもに見せて「これは何かな？」という質問のみ行う。その質問に対し幼児は、自身の過去の体験から、「おにぎり」に対しての想像を膨らませ様々な回答をする。指導者は多様な発言を否定することなく共感的に受け止めるとともに、それぞれの思いに相槌を打ち発言を促す。これらは仲間の考えを聞いて、お互いに影響を受けて、さらに想像力を膨らませていく作業である。この時点では、まだ画材は配布していない。幼児の「おにぎり」に対しての想像的な意見がひと段落した後、画材を配布するのである。

すると、後者の場合では、配り終わると同時に、飛びつかんばかりの勢いで、それぞれ描き始めた。たつぷりとイメージをする時間をとり、ギリギリまで幼児の想像を膨らませたからである。その想像が幼児の本来もっている自由という能力がミックスされ、創造的な表現力へと発展したのである。これは幼児の内なるものを耕し、引き出す指導だと言える。つまり指導者が幼児のもっている可能性を信じ、引き出し、それを刺激し太らせ、そして表現活動を活性化させる指導である。

前者の場合は、指導者は幼児が表現する前に、こちらが意図していることを例示したり、言葉で誘導したりして、幼児のイメージする範囲を意図的に狭めている。一定の指導者の意図が表現に反映されるので、作品はある程度の

そろった完成度を示す可能性が高いが、これは教え込む指導と言える。

前章で紹介した、「落書き」は後者の代表的な表現活動であり、全く子どもを誘導しない。誘導を受けていない子どもの心は、当然のようにのびのびとした創造活動をはじめ。「落書き」とは、子どもが本来もっている表現したいという願いや力を支える教育の原点であると、筆者は考える。

5. 表現の発達段階を考える

前章では、子どもの描画指導には、子どもの内なる願いを引き出すことが重要であると述べてきたが、さらに、筆者は子どもの表現上の発達段階も意識した指導が不可欠と考える。発達とは、子ども一人ひとりの問題であり、一般的な段階としての系統立ては困難であるが、大枠の基準は存在する。美術教育として、子どもの発達段階を指導に活かすことは大切である。

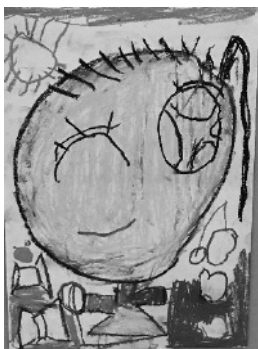
岡田（1955）は幼児画の発達段階にについて、次のように述べている⁽³⁾。

「描写」ということを実物のように描くこと、「表現」ということを自分が発見したとおりに思ったとおりに描くことを意味するとすれば、幼児の絵は描画ではなく、表現でありたいのはもとよりで、大人の絵すら表現できなければ芸術となりにくく、描写的な絵は実用にはなるが、心は出にくいというわけですが、この描写力という点の方にこそ、発達の段階をはっきりと見ることができます。

子どもの絵とは、その子の心の表現である。ただ目に見えるものを、正確に写しとることを狙いとするものではない。その子どもの自分なりの方法で描くことこそ、意義があるのである。そのことを指導者は自覚し、子どもを対象とする美術教育は、子ども自身の流儀で描ける環境づくりをするとともに、その発達段階に応じた指導に心がけなければいけない。

6. まとめ

今の子どもは「落書き」をしなくなっている。否、すると怒られるし、する場所もない。筆者が子どもの頃は、大人に叱られても襖に書いたり、また道にもチョークなどで「落書き」をしたりしたものだ。「落書き」ができない社会に生きる子どもは、どのような成長をするのだろうか。なぐり描きを認められない、一定の方向での表現の強要が、子どもにどのような影響を与えるかについての研究は、今後望まれるところである。



母の日、街頭掲示板に「母親の似顔絵コンクール」が展示されていることが多々ある。さらに、子どもの作品が、最優秀賞、優秀賞、スポンサー賞、佳作、その他と区別されていることもある。

左の2点の作品はこのコンテストで賞を得た作品と、得ていないその他の作品である。これを観た筆者は、子どもの描いたものに優劣をつけることに対し違和感をもった。「落書き」で無心に描く子ども

⁽³⁾ 岡田 清「幼児の絵」 1955年 創元社 pp45

もいるだろう。大人を喜ばせるため、指導を煽りながら母の似顔絵を描いた子どももいるだろう。筆者は子どもの絵を評価することを、全く否定するわけではないが、何のために誰がどのような方法で、どのような基準で評価を行うかが問われるべきだと考える。今日、社会全体が物的に豊かになり、子どもにとって恵まれた描画環境が整ってきている。それにともない、子どもの絵画教室も増加し、教え込む教育が保護者に歓迎され盛んになることを懸念するものである。

【参考文献】

- ・内閣府 「小学生・中学生の意識に関する調査」平成25年
- ・鬼丸吉弘 「児童画のロゴス」1981年 勁草社
- ・Kellogg, R.: Analyzing Children's Art. Palo Alto 1969